

「神に招かれた人々Ⅱ」

マタイ 2:1-12

【1】顕現祭について

今日は教会のカレンダーでは「顕現後第1主日」となっている。クリスマスの後に続くのがこの「顕現祭」である。これは、キリストの誕生によって真理の光が輝き出し、異邦人にも救いが公にされたときを記念する日である。そこで、このとき教会は東の国の博士たちの記事を知るのである。必ずしも歴にとらわれる必要はないが、今日はこの歴にならって、マタイの福音書から聖書を開きたい。

【2】東方の博士たちの来訪

神の招きに神の恵を見ることが出来る。マタイは旧約聖書の預言の成就を意識して異邦人への福音の広がりを書いている。

東方に住む博士たちは天体の異変を手がかりにはるばるユダヤ人の地へとやってきた。彼らはユダヤ人の王に会うために当然のように当時の国王ヘロデのもとへとやってきたのである。このメシヤ誕生の知らせに東方の博士たちが気づいたのも神の摂理であると考えられる。彼らはユダヤ人からしたら神の選びの民ではなく、救いの枠外にいた異邦人である。彼らも羊飼いたちと同じようにユダヤ人たちからは汚れた者と言われるような人々であった。しかし、彼らも神によってあわれみを受け、神が寄り添おうとした人々であった。

このことは私たちも当てはめられることである。私たちが神を知ったことは当たり前ではない。ただ一方的な神のあわれみによるのである。

【3】ヘロデの恐れ

ヘロデは当時のユダヤの王であったが、彼はユダヤ人ではなかった。そのことにコンプレックスを持ち、恐れていたのである。ヘロデは王位が危機にさらされることを恐れ、人一倍に猜疑心が強く、家族や、妻、子どもまでも殺害してしまう人物であった。彼が最も恐れていたのはユダヤ人の王の誕生であった。彼は東方の博士たちの話を聞き、動揺したのである(3)。彼は救い主誕生の知らせを喜びとはせず、かえって恐れたのであった。その恐れはエルサレム中の人々にも影響した。王は真の王を恐れ、民は偽りの王を恐れたからである。その恐れはどちらも的はずれな恐れである。ユダヤ人たちはみことばを知っていたが誤った恐れのために救い主にお会いすることはできなかったのである。

【4】博士たちの礼拝

みことばを聞いてそれに従う者は幸いである。博士たちは自然(星)によって救い主に一步近づくことができたが、彼らにはみことばが必要であった。私たちも同様に、自然を通して神のものを知ることができるが、みことばによらなければ真理を知ることはできない。博士たちは星に導かれ、みことばに触れ、それに従ったとき星は動き出した(9)。これは確かに超自然的な神の不思議なみわざであった。みことばを聞き、それに従おうとする者は必ず救い主のもとへと導かれるのである。

こうして、救い主を前にした博士たちは幼子の前にへりくだり、礼拝をささげたのである。今私たちもただ神のあわれみによって御前に導かれている。その価値を知っているか。